

# 所縁の茶杓

荻江 全詞章

荻江節

茶の湯尽くし

作詞者・作曲者・初演年不詳

〔ハル〕 やあれ、見事に見事に飾り立たる花山車、囃子の笛太鼓

一様にいづれ劣らぬ華やかに、扱もそろうたへ、やんれそれ声かけて囃さんせ警固の衆  
赤坂奴の振り出す振り出す、なにがさてな、さてな、やんれそれ声かけて囃さんせ警固の衆、  
いさぎよや

〔カン〕 伊達を飾るや色々々に、わけて目に立つ

〔ギンガハリ〕 風流出立ち、しやんとこぎりめに、茶筌茶杓の品もよく、帛さばきもなあ、  
かはゆらし

〔三ノギン〕 とかく浮世は恋の世の中、君と我とは濃茶のはなが、人が水さしや薄くなる  
ゑ、憎てらしさよ、いたづら悪じやれ、お手紙じつとも控へた

〔ギン〕 お茶の口切り、たぎらす目もと品定め

〔ハシル〕 まだ初秋のみじかさよ、情薄茶はいやで候、お茶まゐれ

〔ツヅミウタ〕 及ばぬ恋さへ叶ふぞや

〔大カン〕 そもそもお茶のはじまりは、天竺耆婆が息女にて、二十歳にて身罷りし、体の下より  
生へ出づる

〔鶴二せりふ〕 さればお茶の茶の字は、二十の人の木とかけり。春すぎゆけば宇治の里の  
女郎衆、てんでに茶籠を手にとって

〔歌カン〕 赤前垂に赤手拭ひ、小褌をしやんとやらせて、しやんならしやんなら、  
しやんならしやんならとやらせて、橋の下を見てあれば

〔二ノギン〕 水車がくるりのくるりの、くるりくるりくるりの井堰にかかる白波  
どつと打つてはさつと引く、早瀬の水こそお茶の湯には味がよいとの、茶立つる  
音はちやつきりやつきり、ちやつきりこつきり、ちやつきりや、品もよく

〔初五郎・松助出〕 二八盛りの商人も、しやれた風にははかどらず

〔カン〕 とる手はづかし文月も、はや候べくに奈良団扇

〔三ノギン〕 螢来いとて小手招く、かふて下んせ、かはしやんせ

〔ヲドリ〕 恋といふもので、身にしる秋の風吹きに、妻戸の音信、はてもしんき

萩のなびきに招きにだまされて、露のこの身の独寝に、いつそ心にあいそもこそ、月は  
思ひを十寸鏡

曇らず代々も住の江の、松にもゐます神遊び、五穀円満民安全、国土成就の祭事、げに  
面白きけふの賑はひ